

## ワルテッグ描画テストに関する覚書 — 臨床的意義および展望 —

医療法人北仁会 旭山病院 和田 真 紀

### 要 約

本研究では、投影法人格検査のワルテッグ描画テストについて、日本での研究の動向からその有用性や問題点を整理し、本検査の臨床的意義や展望について考察した。また、本検査の紹介も兼ねて、開発者のWarteggの経歴や検査の実施法、解釈法についても触れている。本検査の研究は精神科領域から健常者まで幅広くなされており、パーソナリティ傾向の理解に用いるだけでなく、芸術療法として活用している報告も見られた。豊富な情報量により鑑別能力の高い検査であるとの見解が多い反面、妥当性の検証が不十分であるとの指摘も多い。しかし、従来の問題点を払拭させた新たなシステムが開発され、近年日本に紹介された。その直後から日本でもこの新しいシステムでの研究が見られ始め、今後の本検査の利用の広がりが期待される。

### 1. はじめに

ワルテッグ描画テスト (Wartegg, Zeichentest あるいはWartegg Test, Wartegg Drawing Test, 以下WZT) はドイツの心理学者エーリッヒ・ワルテッグ (Ehrig Wartegg: 1897-1983) によって開発された投影法人格検査である。手法によって用紙の大きさは異なり、A4あるいはA5の検査用紙を用いる。その用紙には5~6mmの黒い枠線に囲まれている4cm四方の正方形4行が2列、計8つあり、その枠の中にそれぞれ性質の異なる刺激図形が描かれている。また、上段の枠には上に、下段の枠には下に番号が振ってある。(図1)。

8つの刺激図形はそれぞれが特定の種類の観念を喚起し投影を促すものであり、被検者がその枠内に描いた描画と言語による描画の説明からアセスメントを行う。鉛筆は概ねHBを用いるが、消しゴムの使用を認めている手法とそうでない手法がある。教示も手法によって異なり、ごく簡単な教示の場合は「それらの8つの枠全てに何かを描いてください」と伝えるのみであるし、手法によっては抽象的な絵は描かないように伝えたり、番号順に描く必要はないこと、時間制限はないことな

どを伝える手法もある。描画検査の中でもテーマを与えられて描くバウムテストやHTPテスト、人物画と異なり、半構造化されているという点で種類を異にする。また、刺激図が8つあることで、あたかも8枚の描画を行ったかのような情報が得られる。加えて、刺激図同士の関係から理解できる側面もあるため、単体での描画よりも単純に情報量が多いだけでなく、輻輳的で奥行きのある理解が可能となる。刺激図形という縛りがある分、自由度が下がるために描きづらさを感じる場合もあるが、ちょっとしたお題をだされたような面白さを感じる場合もあるとされている。概ね30分程度で実施できる上に描画検査の特性上比較的抵抗感を与えにくく、また得られる情報も多いという、タイムパフォーマンス、コストパフォーマンスに優れた検査であると考えられる。適用年齢は4歳半以上とされており、個別だけでなく集団での実施も可能である。

ワルテッグはライブツィヒ大学でゲシュタルト心理学を学びWZTを開発した。その開発にはゲシュタルト学派の理論だけでなく、現代美術や中国の易経、精神分析への関心が影響していると言われている。ワルテッグが心理学者として職業生

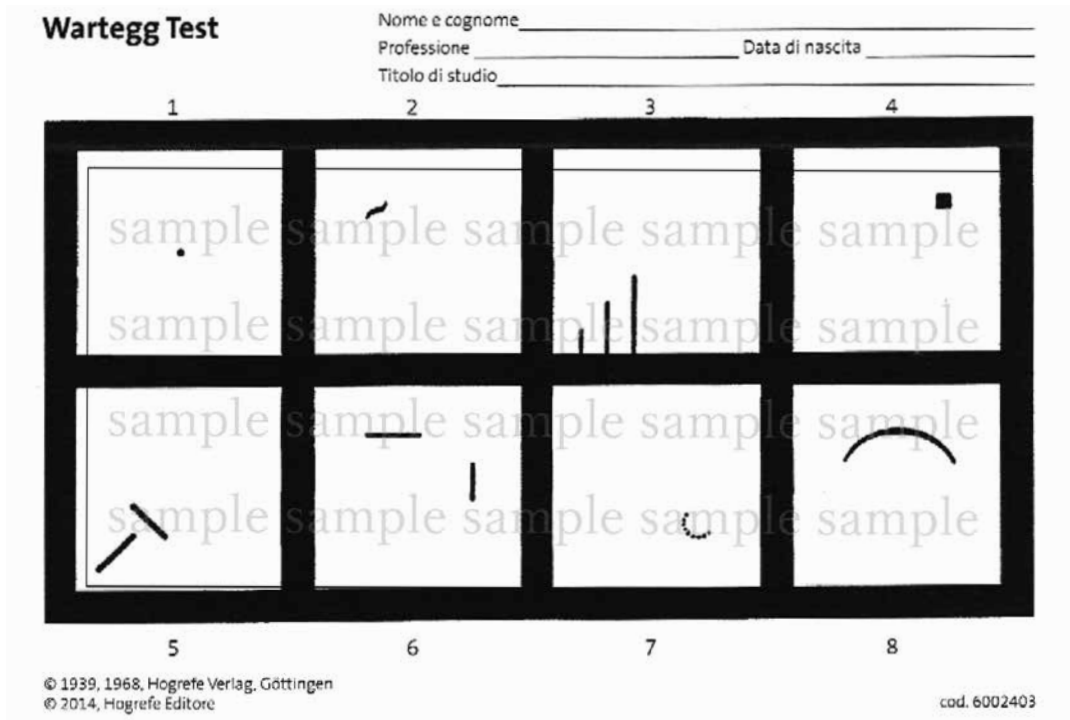


図1 Wartegg Test

このワルテック描画テストはサンプルですのでご注意ください。いかなる複製も固く禁じられています。有効なテスト結果は、専門資格を持つテスト実施者がオリジナルのテスト素材を使用して実施した場合にのみ取得できます。テスト素材は、Hogrefe Publishing Group (www.hogrefe.com) でのみ注文できます。ご質問がある場合は、rights@hogrefe.comまでお問い合わせください。

活を送っていた時期は、ドイツのナチス政権台頭が著しい時期と重なる。そのためワルテックは公然と精神分析への興味を口にすることができず、また、本意ながらもナチス党に入党していた。終戦後そのことで制裁を受け、同僚の証言にて恩赦されるまで心理学者としての活動権利を失っていたという不遇の人でもある。WZTの開発はそのような社会情勢の中で行われており、理論背景には精神分析的な要素が含まれていると推測されているものの、本人は周到にゲシュタルト心理学の用語を用いていたため、どこが、またどの程度精神分析的理論に依っていたか把握することが難しいとの見解がある。ワルテック自身のスコアリングと解釈のためのシステムは非常に煩雑で難しく、今ではほとんど用いられていない。その代わりに、後に様々なシステムが開発されていった(Crisi&Palm, 1998, 2007/2022参照)。日本で主に用いられているのはアメリカのキンジェットによるシステム(以下Kinget法)とドイツのアヴェ

＝ラルマンによるシステム(以下Ave-Lallemant法)、新たにイタリアのクリシによるシステム(Crisi Wartegg System, 以下CWS)があり、それぞれ手法がかなり異なっている。手法の概説については後述する。

## 2. 問題と目的

ワルテックは1953年にドイツにてこの検査のマニュアルを出版した。日本で初めての研究報告があったのは1960年前後との情報があり、マニュアルが出てから比較的早い段階で日本に紹介されたとと言える。最初の論文が報告されてから断続的に研究報告はなされてはいるものの、日本で最も多く用いられている描画検査はバウムテストであり、WZTはランキングの末位にも登場しない(小川, 1992)。また、2014年から2024年の10年間で発表された論文数はCiNii Researchの検索結果によるとわずか7本にとどまる。同じ時期のロールシャッハ・テストの論文は296本、MMPIは45本、

バウムテストで105本の報告があることと比較すると、本検査の知見の蓄積は圧倒的に少ないと言える。本研究では、WZTに関して日本で発表された研究の動向からその有用性や問題点をまとめ、本検査の臨床的意義や展望について考察することを目的とする。

### 3. 方 法

国立情報学研究所の事業として提供されているサービスCiNii Research（サイニイ リサーチ）を用いて検索を行った。以下の通り対象とする論文を検索、抽出した。

- ①フリーワードで「ワルテッグ」「Wartegg」をキーワードとして検索した。
- ②エーリッヒ・ワルテッグ自身が最初にWZTについて発表した1939年から2024年12月までに日本で発表された文献を検索した。
- ③学会発表論文集掲載の研究要旨や講演のまとめは除いた。

以上の基準に基づいて抽出された論文29本について検討した。

### 4. 結 果

日本のWZT研究の動向を以下の4つの点から整理した。大きな流れとしては①用いられるスコアリングと解釈システムが複数あること、②対象が精神疾患患者から健常者にも広がりを見せ、研究内容にも変化があったこと、③Avé-Lallemant法が日本に紹介されてから質的研究の増加がみられたこと、④初期の頃から芸術療法的な活用がなされたことにまとめられる。この4つの点について以下に詳細を述べる。

#### ①スコアリングと解釈のシステム

今回抽出された論文で用いられているシステムは初期の頃からあるKinget法が最も多く、次いで2000年代に台頭してきたAvé-Lallemant法、そして最近新たな手法としてCWSが加わった。その他、独自のスコアリングを行っている研究や、スコアリング自体を行っていない研究も見受けられる。本項では日本の研究で主に用いられているKinget法とAvé-Lallemant法、そして比較的新しい

CWSの手法を概説する。また、それぞれの手法では「刺激図形が喚起する特性」が想定されているが、その内容は一致していないところもある。その違いがシステムごとに比較できるように、表1にまとめた。

Kinget法はアメリカのマリアン・キンジェット（Marian Kinget）が開発したシステムであり、1952年の論文においてワルテッグ自身のシステムを改変させたシステムを構築した。キンジェットは、ワルテッグのシステムで導き出されるパーソナリティー像は類型学的であり大まかな解釈に限定されるものでしかない、と述べており、自らのシステムでは各個人に基づいた理解ができるよう修正を施した。「刺激図形と描画の関係（各ボックスの刺激図形が喚起する特性をどの程度取り入れているか）」「描画内容（何を描いたか）」「描き方（線の質、筆圧、描画領域の割合、陰影など）」について数量化し解釈プロフィールを作成する。そこから「感情（外向的・内向的）」「想像力（統合的・創造的）」「知性（实际的・思索的）」「活動（力動的・統制的）」の8つの指標が導き出され、折れ線グラフ化して解釈する。（Crisi et al. 1998, 2007/2022参照）

Avé-Lallemant法はウルスラ・アヴェ＝ラルマン（Ursula, Avé-Lallemant）が用いた手法である。アヴェ＝ラルマンは1952年にWZTと出会い、高校入試のためのスクリーニング検査として使用していた。その後、筆跡学のフェッテル（August Vetter）に学び、その影響を受けている。いつ頃から現行のシステムを用いていたかは今回明らかにはなっていないが、アヴェ＝ラルマンがWZTに関する本を出版したのは1978年のことである。この手法は数量化のプロセスがなく、描画について以下の項目を言語化して解釈する。その項目は大きく分けて5つあり、「刺激図形が絵に取り込まれているか」「刺激図形の性質に依拠しているか」「各枠のテーマに反応しているか」「絵の分類（要点のみのパターン・絵画的なパターン・形式的なパターン・象徴的なパターン）」「筆跡の分析（線の引き方：一本線・動きのある線・安定している線・不安定な線・連続している線・分断している線、筆跡のタイプ：繊細—鋭い・か細い—硬い・

表1 個々の刺激図が喚起するテーマ

ボックス1	
Kinget法*	小ささ, 丸さ, 中心性
Avé-Lallemant法**	自我の経験
CWS***	中心性, 関連性
ボックス2	
Kinget法	元気な, 動く, ゆるい, はためく, 育つ, 流れる物を示唆
Avé-Lallemant法	感情
CWS	活動性と運動の感覚
ボックス3	
Kinget法	厳格さ, 厳粛さ, 規則正しさ, 順序, 漸進
Avé-Lallemant法	達成, 上昇
CWS	方向性と前進
ボックス4	
Kinget法	重い, 硬い, 重厚な, 角ばった, 静的なものに見え, 個体の物を誘発
Avé-Lallemant法	問題, 重さ
CWS	重さと不動性
ボックス5	
Kinget法	葛藤と活力
Avé-Lallemant法	緊張
CWS	障害の乗り越え, ボックス中央方向への動的な進行
ボックス6	
Kinget法	事務的な, 落ち着いた, 厳格な, 鈍い, 退屈な様相を有している
Avé-Lallemant法	統合
CWS	統合と構造
ボックス7	
Kinget法	慎重な精神活動
Avé-Lallemant法	感受性, 繊細さ
CWS	繊細さ
ボックス8	
Kinget法	有機的な物体, なにかを覆う物, 保護する物
Avé-Lallemant法	安心感
CWS	丸みと閉合

\*金丸(2005)参照 \*\*Avé-Lallemant, 2002・Rhyner, 2000参照 \*\*\*Crisi&Palm, 1998, 2007/2022参照

柔らかい—しっかりした・もろい—乱雑), 平面の処理(影をつける・線影をつける・輪郭を描く・暗くする・荒くする)」である。これらの項目を正確に評定するにはアヴェ＝ラルマン自身の基準を理解し習得しなければならず, 実際に使用出来るまでに相当のトレーニングが必要である(Rhyner, 2000)。

CWSの開発はアレッサンドロ・クリシ(Alessandro Crisi)のロールシャッハ・テストの実施経験が基礎になっているため, ロールシャッハ・テストのスコアリングと似ているところがある。これま

での手法と異なる点は, 信頼性, 妥当性のあるアセスメント技法として実証研究を経ていることである。この手法は描画だけでなく描画内容に対する被検者の言語表現も重視している。それによって描画の判定に検査者の投影が影響することを減じている。描画と言語表現は刺激図の喚起的性質を取り入れる程度, 描画の感情的意味合いや情緒的なトーンの度合い, 形態水準, 反応内容, 特殊スコア, 運動反応, 衝動反応などを数量化し, 標準との比較を行う。スコアリングに関しては厳密な基準やリストがあり, それを参照して行う。ま

たそれらのスコアと、ボックスが描かれる順序や刺激図形の好悪などとの兼ね合いを順序分析として行う。この順序分析は独特でややわかりづらいものと思われるため、具体的に説明する。例えば、1から8までのボックスを何らかの規則性をもって描く被検者と、ランダムに描く被検者では異なるパーソナリティ傾向が想定されている。人間は快原則に従うと好ましく受け入れやすい刺激図から先に描いていくことが自然であるため、機械的に規則性をもって、例えば1から8まで順番通りに描いていくこと自体にパーソナリティ特徴が見出される、ということである。また、好ましいと回答したボックスが後半に描かれる、あるいは好ましいとした刺激図形であるにも関わらず、刺激特性を取り入れて描画していない、情緒的なトーンが否定的であるなど、描画順序と描画の様相に齟齬がある場合、そのボックスが意味する領域で何らかの抑圧や葛藤が想定されるのである。齟齬がなければ単純にその人の強みや弱みを示すこととなる。これら集計された数値や記号によりワルテック精神病理指標が導きだされ、典型的な4つの異なる象限が得られる。各象限ごとに病理性の低い水準 $\alpha$ から病理性な水準 $\beta$ 、更に病理性の高い $\gamma$ が想定されている。A象限： $\alpha$ 正常 $\leftrightarrow\beta\leftrightarrow\gamma$ 過剰適応、B象限： $\alpha$ デタッチメント $\leftrightarrow\beta\leftrightarrow\gamma$ クラスターAパーソナリティ障害(統合失調型、統合失調質、妄想型)またはクラスターBパーソナリティ障害(反社会性)、精神病、C象限： $\alpha$ 依存 $\leftrightarrow\beta\leftrightarrow\gamma$ 強迫性パーソナリティ障害を除いたクラスターCパーソナリティ障害(回避性、依存性)、D象限： $\alpha$ 両価性 $\leftrightarrow\beta\leftrightarrow\gamma$ 反社会性パーソナリティ障害を除くクラスターBパーソナリティ障害(境界性、演技性、自己愛性)である。また、一定の病理によく見られる指標の組み合わせとの照合を行い、知的機能、思考プロセス、利用可能な心理的資質、ソーシャルスキル、情緒機能の側面について検討する。これらがCWSの主な検討事項である。(Crisi et al. 1998, 2007/2022参照)

## ②対象者の拡大と研究内容の変化

日本のWZT研究は精神科領域での活用から始まった。今回検索された最も古い論文は、神経症患者に行った心理療法の効果測定にWZTを用い

ているものである(渥美, 1960)。WZTの結果をKinget法にて整理し、指標の変化や臨床像との照合を行った。また、類似の研究で自律神経失調症患者の心理療法の過程をWZTによって観察したものがある(桂・斎藤・田原・山田・森下・大石・遠藤・牧, 1974)。また、統合失調症患者への絵画療法とWZT併用や、WZTの芸術療法としての活用の報告がある(入江, 1966)。大谷(1962)はWZTを鑑別補助としての活用可能性を検討するために、刺激図形の加工の程度と知的能力や精神病的特性との関連を究明した。その後、これまで主に精神科領域での活用が目的とされていたものが、健常者への活用へと対象が拡大していった。岩淵(1970, 1972)が大学生のパーソナリティ傾向について、異なる学科同士の比較や精神疾患患者との比較によって検討している。しかし、この後岩淵の研究内容に変化が見られる。これまで特定の集団のWZT特徴を明らかにする研究だったところが、次第にWZTそのものの鑑別能力を検証する研究へ変化していく。WZTの信頼性について(1973)、描画能力の判定に及ぼす影響(1974)、妥当性の検討(1975)がそれに当たる。またこの一連の研究により、Kinget法の問題点がいくつか提起され、WZTのより有効な評価法を探す意図でKinget法とワルテック自身の評価法を比較する研究がなされた(1976)。岩淵の研究は今回検索された30本の論文のうち7本の研究を上梓しており、この時代のWZT研究を牽引した。しかし、1976年の岩淵の研究を最後に、WZTに関する報告は一時的に途絶えている。その後、Kinget法の検証を行う研究は田畑(2008)によってなされているが、その後の報告はみられない。

2020年代に入ると、滑川、横田によるWZTのうつ病との関連の研究が目立つ。(2021, 2022, 2024a, 2024b)。これまで滑川らが行ってきた気分障害や抑うつに関する研究(2006, 2007, 2008, 2011a, 2011b, 2012a, 2012b, 2013, 2015, 2017, 2020)から、抑うつ傾向におけるZWTの傾向を見出し、抑うつのアセスメントツールとして用いる試みを進めている。これらの研究はWZTの結果をBDI-IIや自動思考質問紙で示された抑うつの高低群で分け、その傾向の検討に

よって行われている。上記滑川らの研究はAvé-Lallemant法のスコアリングを用いて結果を整理しているが、2020年から2025年の期間で行われている科学研究助成事業では近年新しく日本に紹介されたCWSを用いて健常者のデータを収集する計画が出されている。最近では司法領域での利用が見られ、男性受刑者を対象としたCWSの事例報告ではTATとWZTの結果から対象者を理解し、再犯防止に対する示唆を得ている（森田・鈴木, 2023）。また数量的研究の中で、男性受刑者の特徴をCWSによって検討している（鈴木・村上, 2023）。しかし、この研究はCWSの限られた指標のみの検討であり、CWSを用いた研究はまだ始まったばかりであると言える。

### ③質的研究の増加

初期の研究に質的研究がなかったわけではないが、2000年代にAvé-Lallemant法が台頭してからはその数が増えていった。Avé-Lallemant法を用いたアトピー性皮膚炎及び気管支喘息患者の事例（杉浦・原・鈴木, 2002）や難治性過敏性腸症候群の事例（原・杉浦・仲本, 2023）、学生相談で継続相談の間に2回WZTを用いた事例報告（飯田, 2003）がある。これらの事例では、WZTを星と波テスト、バウムテストと併用した「投影描画法テストバッテリー」を用いている。Avé-Lallemant法を用いた事例の研究者の多くがこの3つのテストを組み合わせたバッテリーを用いているのは、星と波テストがアヴェ＝ラルマンの創案であり、このテストバッテリーの活用を推奨しているからであろう。Avé-Lallemant法はこれまで日本で多く用いられてきたKinget法と異なり、描画を数量化せず質的なデータのまま解釈することが特徴である。原ら（2023）によって星と波テストは「無意識（深層心理）の中でも最も深い層にアプローチ」し、バウムテストは「無意識の中間層にアプローチするテスト」で、「身体的な自己の表象であり、生きてきた自分が描写される」、WZTは「現実の事物や人間、情景などが投影されやすい」とまとめられている。このバッテリーの描画により表出された無意識のメッセージを通して心身症患者の病態をよりよく理解することが可能であったこと、また、アレキシサイミ

ア傾向や過剰適応的な傾向のある心身症患者の無意識的側面のパーソナリティや病態の理解だけでなく、その後の治療経過や治療効果を明確にすることができる有用なツールであることを述べている。学生相談では描画検査のもつ芸術療法的側面や与える抵抗感の少なさが学生相談の場面で有用だったと述べられている。

ただし、Avé-Lallemant法でも数量的研究は行われている。以下の論文は分析にWZTが用いられた明確な理由が読み取れなかったのだが、大徳・西村（2005）が17人の軽度発達障害の発達特徴の理解にWZTを用いたり、西村（2007）が保育士と保育学生のパーソナリティ傾向やストレスについて星と波テストとWZTを用いて検討している。高柳（2008）は、都市空間における緑陰の効果についての心理的分析の部分でWZTを用いている。

### ④芸術療法的活用

WZTは初期から精神科領域での絵画療法との併用やWZTの芸術療法としての活用の報告がある（入江, 1966）。1966年の時点で既に芸術療法としての活用の萌芽が見られるのは興味深い。入江の絵画療法としての論文と時を同じくして創造性を測るツールとしてWZTを用いる研究があり、WZTと芸術の関連性の強さが窺える（松山・大西・竹内・上野, 1966）それから30余年の時を経て、新たな芸術療法としてのWZTの活用が報告され始める。寺沢、伊集院（2001）、および寺沢（2013）によって開発された絵画療法の一つである「並列型誘発線法」および「ワルテック誘発線法」を用いた「再構成法」をPTSD患者へ活用した事例が報告された。これは、後藤・中井の誘発線法（1983）にWZTの技法を援用した「並列型誘発線法」と、WZTを絵画療法として用いるために3つの変更を加えた「ワルテック誘発線法」を用い、さらに描かれた描画を使って新たな作品を作る「再構成法」を組み合わせた技法である。「ワルテック誘発線法」はWZTの枠を黒色から灰色にする、用紙をA4サイズにして余白を広く取る、枠外の数字の削除をする、という3点の変更を加えている。寺沢（2013）は枠の色と用紙サイズの変更により圧迫感を減じ、数字の削除に

よって上下の縛りをなくして投影法的な傾向を高めている。また、心理療法の中でワルテック誘発線法と並列型誘発線法を用いた再構成法を用いることの意義として、これらの技法が‘退行促進的でありながら同時にCI自身の内面の統合促進をもたらす技法である’とし、‘この作用によって、内面の奥深くに眠っていたA (CI) の生命力が息を吹き返したように感じられた’、と述べている。また、柳・荒蒔・篠田・篠田 (2001) がKinget法による大学生対象の数量的研究と合わせて、WZTの実施に彩色も加えて大学生の心理状態の理解の一助としている。色彩の活用という描画検査の特色を活かした試みと言えよう。

## 5. 考 察

今回検討の対象となった論文では、WZTは豊富な情報をもたらす鑑別能力の高い検査であること、また芸術療法としての有用性もあるなどの利点が挙げられながらも、システムによっては解釈の根拠の不明確さ、妥当性の低さの指摘も多い。CWSは海外ではヨーロッパや北欧、南アメリカで活発に活用され、それぞれの国で独自に発展を遂げた経緯がある。コミュニティを超えた交流がなく、互いの研究にアクセスすることが困難だった。このことが検査の実証的な裏付けの必要性を減じさせ、多くのシステムで臨床的活用はあったものの妥当性の研究は行われてこなかった (Crisi et al. 1998, 2007/2022参照)。手順の複雑さと併せ、妥当性の問題は日本で本検査が十分に普及されなかった要因と考えられる。この手法の課題に対して量的研究が行われた時期もあったが、課題の解決は道半ばで途絶えている。2000年前後の質的研究の隆盛も加わったこともあってか、描画のデータを数値ではなく言語的に整理して解釈を行うAvé-Lallemant法が主流となり (金丸, 2005)、Kinget法を用いた研究はここ15年見られていない。Kinget法はワルテック自身の統計的、類型学的方法であるWartegg法から派生したシステムでWartegg法と同様に結果の処理が煩雑である (金丸, 2005)。また、信頼性はあるが (岩淵, 1975)、海外においても妥当性については未報告 (岩淵, 1974) であった。何よりキンジェット自身が自身

の方法論の手順について‘詳細で長大なものではあるが、にもかかわらず、厳密な判定と治療という科学的理想を実現するには程遠い’ (Crisi et al. 1998, 2007/2022参照) と認めている。心理学者として非常に謙虚な姿勢であると思われるが、Kinget法の限界が示唆される発言でもあるようにも思われる。その後隆盛を見せたAvé-Lallemant法は筆跡分析が専門のフェッテルの影響を強く受け、描画の解釈に筆跡を重視しているのは前述の通りである。筆跡を重視しているという時点で既にその評定は主観に傾きやすいことが示唆されるが、やはりAvé-Lallemant法の問題点として多く挙げられているのは、投影法共通の問題点として客観性、妥当性の検証が難しいこと (杉浦ら, 2002) や、解釈が主観に偏らないように研鑽が必要 (飯田, 2003) などであった。これらの課題を払拭するものとしてクリシのCWSが開発、邦訳され (Crisi et al. 1998, 2007/2022参照) 少しずつではあるが報告されてきている。クリシとフィン (Stephen E. Finn) による目隠し分析の試み (2013) ではフィンのクライアントが描いたCWSをクリシが目隠し分析し、フィン自身の治療的アセスメント (WAIS-IV, ロールシャッハ・テスト, MMPI-2) の結果と比較している。この試みの結果、概ね両者の分析結果は矛盾なく、それぞれがより詳細に記述できる部分があり、検査によって鑑別力の発揮できる部分が異なることも窺われた。このようにさまざまな取り組みがなされ始めている今後のCWSの発展に大いに期待する。

また、異なる流れとして芸術療法としての発展がある。WZTの芸術療法としての可能性がかなりの初期から述べられており、時を経て「ワルテック誘発線法」の開発により絵画療法としての活用があることも興味深い。ワルテック自身が音楽、著述、美術、舞台芸術の才に長けており、美術に関しては抽象絵画の創始者とされるカンディンスキー (Wasily Kandinsky) との交流があるなど芸術に造詣が深かったことを鑑みると不思議なことではないようにも思われるがこじつけだろうか。寺沢 (2010) の「並列型誘発線法」および「ワルテック誘発線法」は同時に8つのものを心の奥

から釣り上げてくる釣り針を持っているような技法である」とあるように、元来の心理検査としてのアセスメント機能を活かした技法であり、それだけにクライアントが予期しないものが明らかになってしまう可能性もあるが、「再構成法」によって自我機能を関与させて防衛することが安全弁にもなる（寺沢，2010）と述べられているとおり、クライアントの安全を守る仕組みが組み込まれた技法である。心理検査としての展開の他に、このような芸術療法としての発展が期待される。

## 6. おわりに

今回の報告では、現時点では日本においてかなりマイナーな心理検査を取り上げた。筆者はこれまで精神科領域で心理業務に従事してきた。その中で、他職種心理士への期待は患者のアセスメントであると感じており、実際心理検査は数ある業務の中心の一つとなっている。筆者自身の力不足は否めないが、限られた時間の中で多くの心理検査を実施するには能力を超えた限界があることも確かである。短い時間で多くの情報を得られる、できればロールシャッハ・テストやMMPI並みの情報量を得られる心理検査があればと考えていた矢先に偶然にもCWSの存在を知り、その手法の確かさや実施の簡便さに惹かれ、実践的取り組みを始めたところである。そこで、今後WZTの実践と研究を進めるためにもこれまでの動向をまとめてみたいと思った次第である。ワルテッグが時代に翻弄されてもおお心理学者、心理士として生涯を終えたことに感銘を受け、更にこの検査への関心が深まった。改めてこの検査の刺激図を眺めると、まるで現代美術を見ているかのような不思議な感覚を覚える。今後の課題としては、CWSを実践し、より良い活用法を探ると共に、その知見を蓄積していくことに考えている。

## 〈付 記〉

- ・本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。
- ・テストサンプル図の掲載については、2025年にhogrefe社の許可を得ている。
- ・本稿の内容は日本心理臨床学会第44回大会

（2025年9月）において発表したものを加筆修正したものである。

## 謝 辞

本稿をまとめるに当たり、多くのご指導、ご示唆、激励をいただきました札幌学院大学名誉教授井手正吾先生にこころより感謝申し上げます。

## 文 献

- 渥美冷子（1960）：パースナリティ研究のための1つの有効な手段としてのワルテッグ描画テスト（WZT） 心理学研究, 31(2), 121-125.
- Avé-Lallemant, U. (1994) : Der Wartegg-Zeichentest in der Lebensberatung (高辻玲子・杉浦まそみ子・渡辺祥子訳 (2002) : 心理相談のためのワルテッグ描画テスト川島書店)
- 栗村昭子（2000）：内田・クレペリン検査とワルテッグ描画テストに関する一考察 関西福祉科学大学紀要, (4), 73-77.
- Crisi, A. & Palm, J. A (1998, 2007) : The Crisi Wartegg System (CWS) Manual for Administration, Scoring, and Interpretation (村上貢訳 (2022) : クリシ・ワルテッグ・システム CWS 実施・スコアリング・解釈のためのマニュアル 金剛出版)
- Crisi, A. (2013) : 講演 ワルテッグ描画完成法 スコアリングと解釈の新しい方法論 : クリシ・システム 包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌/ 包括システムによる日本ロールシャッハ学会 編 (特別号), 61-71.
- 大徳亮平・西村喜文 (2005) : 描画テストにおける軽度発達障害児の発達の研究—星と波テストとワルテッグ描画テストを用いて— 西九州大学・佐賀短期大学紀要, 36, 59-69
- 原信一郎・杉浦京子・仲本政雄 (2023) : 投映描画法テストバッテリー (星と波描画テスト, ワルテッグ描画テスト, バウムテスト, 筆跡の分析) を用いて自律性中和法による治療経過を検討した難治性過敏性腸症候群 (心身症) の1例 日本心療内科学会誌, 27(1), 3-19.
- 飯田緑 (2003) : 学生相談における描画法の可能性—最終回の2枚目で本音が出た事例— 学生相

- 談研究, 24(2), 172-180.
- 入江是清 (1966) : 精神分裂病者の絵画に関する臨床精神医学的研究, 自由画, ワルテッグ描画テスト, 絵画療法 東邦医学会雑誌, 13(4), 217-235.
- 岩淵忠敬 (1970) : Wartegg-Zeichen-Testの健康人に対する試験の適用 順天堂大学文理学紀要, 13, 63-74.
- 岩淵忠敬 (1972) : Wartegg-Zeichen-Testの健康人に対する試験の適用 (資料) 順天堂大学文理学紀要, 15, 27-36.
- 岩淵忠敬 (1973) : Wartegg-Zeichentestの有効性に関する研究-1-信頼性の検討 順天堂大学文理学紀要, 16, 33-38.
- 岩淵忠敬 (1974) : Wartegg-Zeichentestの有効性に関する研究-2-描画能力がKinget法による判定に及ぼす影響 順天堂大学文理学紀要, 17, 31-45.
- 岩淵忠敬 (1975) : Wartegg-Zeichentestの有効性に関する研究-3-Kinget法の判定の妥当性の検討 順天堂大学文理学紀要, 18, 7-15.
- 岩淵忠敬 (1976) : Wartegg-Zeichentestの有効性に関する研究-4-Kinget法とWartegg法の評価法の比較 順天堂大学文理学紀要, 19, 28-35.
- 金丸隆太(2005) : ワルテッグ描画テスト(WZT)の解釈に関する一考察—Kinget法, Avé=Laremant法の比較— 茨城大学教育学部紀要 (教育科学), 54, 491-507.
- 桂戴作・斎藤勝也・田原実・山田利子・森下淳夫・大石光雄・遠藤文子・牧正興 (1974) : 心理療法によって著明な寛解をみた自律神経失調症の1例 精神身体医学, 14(4), 253-257.
- 森田未希・鈴木純 (2023) : 一男子受刑者を対象としたTAT及びワルテッグ描画テストの結果から見る, 対象者理解と再犯防止に対する示唆について 犯罪心理学研究, 61 (特別号), 76-77.
- 滑川瑞穂・坂本真士・横田正夫 (2006) : 自己受容性とソーシャル・サポートの互恵性が対人感情状態に与える影響 日本心理学会大会発表論文集, 70
- 滑川瑞穂・伊藤菜穂子・横田正夫 (2007) : 被受容感と実行されたソーシャル・サポートおよび抑うつとの関連について日本心理学会大会発表論文集, 71
- 滑川瑞穂・横田正夫(2008) : 被受容感とソーシャル・サポートの抑うつにおける抑制効果についての検討 日本心理学会大会発表論文集, 72
- 滑川瑞穂・横田正夫 (2011) : 抑うつにおける認知のゆがみと認知機能との関連について 日本心理学会大会発表論文集, 75
- 滑川瑞穂・横田正夫 (2011) : 抑うつの認知的特徴について—大学生における認知のゆがみと遂行機能との関連から 精神医学, 53(11), 1115-1122.
- 滑川瑞穂・横田正夫 (2012) : 健常な大学生から抽出されたBeck Depression Inventory Second Edition (BDI-II) 評価による抑うつの特徴について 精神医学, 54(7), 699-708.
- 滑川瑞穂・横田正夫 (2012) : 気分障害, 統合失調症のWAIS-IIIのプロフィール傾向について 日本心理学会大会発表論文集, 76
- 滑川瑞穂 (2013) : 抑うつの認知的特徴に関する臨床心理学的研究 日本大学 博士 (心理学) 甲第4576号 2013-03-25 博士論文
- 滑川瑞穂・横田正夫 (2015) : 抑うつの変化に伴うバウムテストに関する検討 日本心理学会大会発表論文集, 79
- 滑川瑞穂・横田正夫 (2017) : バウムテストの表現に関連する抑うつ症状について 臨床描画研究 / 日本描画テスト・描画療法学会 編, 32, 143-156.
- 滑川瑞穂・横田正夫 (2020) : うつの2要素に関連するバウムテストの描画特徴: 大学生を対象とした2度の調査から 臨床描画研究 / 日本描画テスト・描画療法学会 編, 35, 101-119
- 滑川瑞穂・横田正夫 (2021) : うつ病患者におけるワルテッグ描画テストの特徴について 明治学院大学心理学部紀要, 31, 1-12.
- 滑川瑞穂 (2022) 大学生の抑うつ傾向におけるワルテッグ描画テストの反応特徴: 臨床描画研究, 37, 115-129.
- 滑川瑞穂・横田正夫 (2024a) : ワルテッグ描画テ

- ストの刺激図形に対する印象と抑うつとの関連  
臨床描画研究, 39, 72-85.
- 滑川瑞穂・横田正夫 (2024b): 抑うつ傾向に関連したワルテッグ描画テストとバウムテストの描画特徴 明治学院大学心理学紀要, 33, 13-24.
- 西村和久 (2007): 保育士と保育学生のストレス比較研究 桜美林国際学論集マジス, 12, 189-199.
- 小川俊樹 (1992): わが国における臨床心理検査の現状と日米比較 筑波大学心理学研究, 14, 151-158.
- 大谷亘 (1962): Wartegg Zeichentestに関する研究 京都府立医科大学雑誌, 71(7), 553-574
- Bruno Rhyner (2000): 星と波テスト入門 川島書店
- 杉浦京子・原信一郎・鈴木康明 (2002): 心身症患者 (アトピー性皮膚炎・気管支喘息患者) の投影描画法テストの検討 日本芸術療法学会誌, 33(1), 5-14.
- 鈴木純一・村上貢 (2023): クリシ・ワルテッグ・システムから見た男性受刑者の特徴 犯罪心理学研究, 61 (特別号), 118-119.
- 田畑光司 (2008): 描画テストに関する基礎的研究3: ワルテッグ描画テストについて 埼玉学園大学紀要. 人間学部篇, 8, 99-106.
- 高柳和江 (2008): 都市空間における緑陰の効果—生理的, 心理的, 身体的分析— 日本補完代替医療学会誌, 5(2), 145-152.
- 寺沢英理子・伊集院清一 (2001): 「再構成法」における重ね貼りの意味—並列型誘発線法とワルテッグ誘発線法を用いて— 心理臨床学研究, 19(2), 149-159.
- 寺沢英理子 (2010): 絵画療法の実践—事例を通してみる橋渡し機能 札幌学院大学選書 遠見書房
- 寺沢英理子 (2013): 誘発線技法の心理療法への適用 Wartegg-Zeichen-Testの改変を紹介しつつ 心理臨床学研究, 31(2), 289-300.
- 山松質文・大西世輝子・竹内陽子・上野古乃江 (1966): 創造性に関する研究(1) 視的想像性, 造形的才能, 音楽的想像性, 音楽的才能を中心に 大阪市立大学家政学部紀要, 13, 85-103.
- 柳昌代・荒蒔裕子・篠田直子・篠田晴男 (2001): 大学1年生にみる青年期の生活体験と感情体験 (II) —ワルテッグ描画テストを用いて— 茨城大学教育学部紀要 (教育科学), (50), 195-208.